

「待つ」ことの価値

校長 二瓶 亮

7月に入りました。梅雨明けが待ち遠しい中、吹中生は1学期の終わりに向けてやり残しがないよう、学習に部活動にとそれぞれ頑張っています。

先月15日(木)から17日(土)※一部競技は19日(月)まで運動部の3年生にとっては最後の公式大会(中体連)となる学校総合体育大会班大会が行われました。3年ぶりに声を出しての応援ができるようになり、各競技会場では、選手と応援とが一体となって戦う姿がありました。勝負なので勝ち負けは付きますが、最後まで全力で競技する姿は輝いており、吹中生の戦う姿が誇らしかったです。大会前日の「壮行会」で私からお願いした「自分らしく戦う」「(緊張感の中でも)試合を楽しむ」「(プレーやマナーのよさから)応援したくなる学校」はしっかり体现されていたと感じました。現在の3年生もコロナに翻弄される中での活動を強いられて、辛く苦しい時期があったかと思えます。しかし、見方を変えると、それらは自分が強くなるための必要な経験であり、一緒に活動してきた仲間との絆が深まったことにもつながっています。大切なのはこの経験をどう生かしていくかです。すべての経験を自分の成長につなげられる吹中生であってほしいと思えます。

さて、1学期も残すところあと3週間となりました。夏休みは授業がない分、多くの時間ができます。1,2年生は部活動に、3年生は卒業後の進路選択を考えるためにそれぞれ時間を使うことになると思いますが、それでも普段できないことに使える時間は増えます。この時間を無駄なく、効率よく使うことが求められますが、あえて「待つ」という見方によっては無駄な時間と思われる時間の使い方に注目してみましょう。

「かつて『待つ』ことはありふれたことでした。人を待つ、食堂で注文したものを待つ、出したラブレターの返事を待つ、果物の食べ頃を待つ。**待ち焦がれつつ時間潰しをすること、期待しながら不安を抱くこと、そんな背反する想いが『文化』という形を醸成していました。**」(哲学者 鷲田清一著 「待つ」ということ)より。

現代は何でもスピードが求められ、効率が追求された結果、日常から「待つ」ことが消えています。スマホの普及によって知りたいことは検索すればすぐに分かり、遠方の人ともすぐ連絡が取れる(顔を映せば表情も分かる)、時間を指定すれば待つことなく品物を受け取れるなど。「便利になった」と歓迎する一方で、「待つ」という行為に潜む大切な価値を見失ってはいけないと思えます。果物の食べ頃は「育つ」「熟成する」時間が必要です。当然、私たち人間(体や心)の成長にも育つ=待つ時間が必要です。茶色く濁った泥水が入った容器の中にコインを落とすとき、手を入れて闇雲に探すより、しばらく放置して泥が沈み、水と分かれた状態を見計らって探す方が賢い方法といえます。忙しくもがいている日常(濁った泥水の状態)を、心を静かに保ち、舞い上がった泥を沈める。この「待つ」「ぼんやりする」時間が実は大切です、何も考えずにぼんやりしているときにこそ、ひらめきが降りてきたりするという話はよく聞かれます。「待つ」時間を、スマホをいじって潰してしまうと頭も心も休まる暇がなく、ひらめきは降りてきません。ひらめきという訪問者は、忙しい人を嫌い、ぼんやりしている人を好むともいわれます。



夏休みは普段できないことに時間をかけてじっくり挑戦してもらいたい。それに加えて便利な道具(スマホやPC等)を手から離し「心を静かに保つ時間」=「ぼんやりする時間」を作ってもらいたい。ヒマではなく、自分を俯瞰的に捉えて見つめ直す時間です。吹中生には伸びしろがたくさんあります。自らの力で可能性を伸ばせる吹中生であってほしいと思えます。保護者、地域の皆様には、子供たちの成長を見守り、自分たちで育つのを**待つ**姿勢での御支援をこれからもよろしくお願ひします。